新刊紹介

店田廣文『日本のモスク――滞日ムスリムの社会活動』山川出版社、二〇一五年

小野　亮介
慶應義塾大学大学院文学研究科
後期博士課程

本書は著者らが中心的な役割を果たした調査や早稲田大学で例年開催される「全国マスジド（モスク）会議」などの成果を基に、日本各地に広まるモスクと滞日ムスリムの現状とその課題を論じたものである。以下各章ごとに内容を紹介したい。

第一章では各種統計に依拠し、滞日ムスリム人口と外国人ムスリムの構成を分析している。それによれば現在の滞日ムスリム人口は約一一万人と推計され、外国人ムスリムの滞在資格を国別に検討すると、永住者や日本人の配偶者が中核を占めていることが多い。

第二章ではモスク建設の類型化が試みられる。一九九〇年代後半より活発になったモスク建設は二〇〇〇年代に入るとラッシュを迎えた。著者は具体例を挙げつつ、それらを四類型に分けている。なかでもコミュニティや留学生の主導との併用である

外部資金活用型は、今後のモスク建設にとっても有効であろうと著者は推測する。

第三章では社会的活動に焦点が当てられ、教育、相互扶助、婚姻・葬儀やハラール認証など、礼拝の場に加えてモスクの果たす役割が紹介されている。永住ムスリムがコミュニティの中核をなし、日本人ムスリムも着実に増加している現在にあって、イスラーム学校の建設はムスリム・コミュニティが果たすべき課題であるという筆者の指摘は見逃せない。

第四章での主な検討課題は、コミュニティの継承と次世代ムスリムの育成である。特に本章では、税制上で有利な宗教法人格や一般社団法人格の取得過程やその組織運営が詳細に述べられている。また、モスク間ネットワークの形成についても紙幅が割かれている。

最後の第五章はコミュニティの課題として日本社会との関わりに着目する。モスク建設反対運動のように時として拒否反応を示すこともある地域社会に対し、本章では滞日ムスリムが説明会や様々な行事、東日本大震災時の救援活動などを通じて歩みよろうとする試みが紹介されている。

滞日ムスリムおよびモスクに関する充実した統計データの活用も本書の特徴の一つだが、最も評価されるべきは、フィールド調査やマスジド会議などを通じ滞日ムスリムによる生の声、コミュニティの実態の数々を、都心のみならず地方各地のモスクについても拾い上げている点だろう。特に一九九〇年代以降二〇年近くコミュニティの「プレーヤー」（指導層）が替わっていないという重い現実（四章）に、滞日ムスリムは真摯に向き合わなければならない。著者が度々指摘するように、滞日ムスリムには今後も地道な努力が求められるが、非ムスリム日本人社会が彼らに対して理解を深め、働きかけることは表裏一体の課題である。それは近年賑わいを見せるハラール認証に限ったことではない。したがって本書はイスラームに関係する研究者や学生はもちろんのこと、滞日ムスリム・コミュニティと向き合うべきごく普通の市民にこそ読んでほしい一冊である。